

宝彩有菜の

# バガヴァッド・ギーター

第3回「悟りの教えを聞く条件とは？」

text: 宝彩有菜

バガヴァッド・ギーターは、マハーバーラタというとても古いお話の中に、埋め込まれた「修行」の解説書です。物語の中でその部分だけが浮き上がっても、流れがおかしくなりますから、全体の物語の流れを尊重しながら、「修行の解説」をなんとか盛り込んであります。

ですから、もともとの形が、教科書とか、テキストであるなら、本来は、ちゃんとそれぞれの項目として、解説すべき大切なポイントが、バガヴァッド・ギーターは物語の一部なので、隠された言い方をしてあるところがあります。というか、とても分かり難い言い方になっている部分もあります。

大切なので、どうしても書かねばならない項目なのだが、ちょうど良い展開が見つからないので、とりあえず、忘れないように書きとめておいたという感じです。

そのようなところを見つけると、バガヴァッド・ギーターの作者は、修行のマニュアルをマハーバーラタの中に埋め込むのに、相当工夫したのだらうなあと苦勞が偲ばれます。そのような工夫をしてくれたおかげで、2000年近く経た、現在にまで伝わってきているのですから、分かり難いこととは言え、とてもありがたいことだと思います。

たとえば、その一つが、バガヴァッド・ギーター第二章にあります。

サンジャ曰く：（サンジャというのは、この物語全体を盲目の王様に語っている語りべです）

“グダーケーシャは、フリシーケーシャにかく言い終わって、敵を悩ますものは、われ闘わじとまったく沈黙せり。”(2-9)

フリシーケーシャとは、クリシュナの別名で、「感官の征服者」の意です。グダーケーシャは、アルジュナの別名で「怠惰(居眠り)の征服者」の意です。

つまり、怠惰(居眠り)の征服者アルジュナは、感官の征服者クリシュナにこう語り、「私は戦わない」と言って口を閉じた。ということです。

バガヴァッド・ギーターは、第二章から、修行についての解説が始まります。クリシュナという修行の先生に、アルジュナという修行者が、次々に質問する形で、このバガヴァッド・ギーターは進んでいきますが、そもそも、修行者は、誰でもなれるのか、クリシュナに質問する資格のある人とはどんな人なのか、あるいは、その条件は何なのか？ 修行を始める際の最低限の条件は何かということですが、それがまず、書かれています。

先にその答えを言えば、3点です。

- (1) 瞑想中に眠らないこと。
- (2) 瞑想の結果を気にしないで、瞑想の実践ができること。
- (3) 瞑想について正しい知識の習得に励むこと。



この資格要件が揃っていないと、瞑想を教えることは非常に難しいです。「例えば、瞑想中に眠らないようにするにはどうしたらいいですか？」と言われても、「印を結んで、瞑想し始めて印が解けそうになる

と、あっ、私は眠りそうになっていたと気がつきますので、それで、瞑想を止めてください」などと、指導しますが、「印を結んでいても、しばらくしたら眠ってしまうのですが、どうしたらいいですか」と言われたら、それは、もう、指導の限界を超えています。指導の仕様がありません。あえてするとすれば、わずから5秒でも瞑想できたら、次は、6秒できるように頑張ってください。くらいしか言えません。眠らないことを指導することはできません。そして、瞑想中に眠らない人にしか、瞑想を教える事ができません。ですから、瞑想の修行ができるための第一の資格要件は、(1)瞑想中に眠らないこと、眠らないで瞑想できることです。

第二の重要な資格要件は、引き続きバガヴァッド・ギターの第二章に出てきます。

クリシュナがアルジュナに言います。

「君の関心をただ行為にのみあらしめよ。君には、定められた義務を行う権利はあるが、行為の結果については、どうする権利もない。結果を自分の行為の動機とは考えるな。だが、また怠惰(眠り)におちいてもいけない」(2-47)

また、

「アルジュナよ、義務を忠実に行え。そして、成功と失敗とに関するあらゆる執着を捨てよ」(2-48)

と言います。

物語の流れからは、ここで、クリシュナは、戦いたくないアルジュナに「結果を気にしないで、自分がすべきことをなせ」と言っている風になっています。本来の瞑想の教科書として言えば、瞑想の実践をするときに、「結果を気にしないで、とにかく、実践に励め」といっているわけです。「過去情報を閲覧したい」だとか、「エクスタシーを得たい」だとか、「何か、深い体験をしたい」だとか、そのような結果を求めて瞑想の実践をしては、いけません。それでは瞑想になりませんと言っているわけです。もっと言えば、そのような人に、いくら瞑想のやり方を説いても正しい瞑想の実践ができないと言っています。

それはそうです。「思考を無くす」のが、瞑想の本来の目的なのですから、そこに、「結果を求める欲=思考」があるのであれば、それは、どんなに瞑想に励んでも、本当の瞑想にはならないということです。目の前の敵と、とにかく戦え、結果は、神に任せろ、結果は気にするな、それができるなら、瞑想は進むと言っています。

瞑想の実践は、「集中」「気付き」「棚上げ」の3浄化手順をサイクルで実践することですが、これは、いわば、マインドとの戦いです。一つ一つ次々に現れてくる「思考」をいかに、手早く棚上げするかが勝負です。その結果、第二段階に入れます。でも、第二段階に入ろう、入ろうとしていると、その「入りたい」という「思考」が邪魔をして、決して入れません。

だから、クリシュナは、「行為の結果については、君はどうする権利もない。結果を意識した行為はするな」と諭しているわけです。



次に、修行者の資格要件の第三番目の項目がでてきます。

「知性(ブッティ)が真理と合一した人は、行為の結果を捨てることによって、生と死の束縛から解放され、無憂の境地に達するのである。知性(ブッティ)が迷妄の密林から脱け出ると、いままで聞かされて